

名古屋城三の丸遺跡（名古屋市中区）

名古屋城三の丸遺跡は、戦国時代から近世を主体とした遺跡で、本センターでは6地点目となる調査区を5～9月にかけて発掘しました。8月26日に現地説明会を行い、戦国時代の屋敷を区画する溝や近世後期の出土遺物を公開しました。

整理速報 しもかけ 下懸遺跡

安城市下懸遺跡出土の木製甲片について

安城市小川町所在の下懸遺跡から、木製甲とみられる破片が出土しました。

下懸遺跡は矢作川下流域の右岸に位置し、碧海台地と矢作川によって形成された沖積低地との境を流れる鹿乗川の河川改修にともない、本センターが平成12年度に発掘調査を行ないました。その結果、調査区南端で確認された幅約20mの自然流路から約300点におよぶ多量の木製品が出土しました。このうちの大半はヒノキ・マキ・クリの丸太材ないしは板材で、製品としては伊勢湾型曲柄鍬・直柄横鍬・一木鋤（未成品）などの掘削具、竪杵・木錘などの農具、槽・箱側板などの容器、扉板・梯子などの建築材、舟形などの祭祀具があります。これらの所属時期は、共伴する土器から廻間Ⅱ式併行期（3世紀後半頃）と考えられます。このほか、上層からは曲物などとともに、「四書五経」の題名を記した習書木簡が出土して話題となりました（「まいぶん愛知」no.65）。

木製甲は13点の破片となって出土しており、うち7点の破片については写真のとおり接合できました。残存長は16.5cm、幅は11.2cm、厚さは1.4cm。木取りは縦木取りで、外面は漆？を塗って黒色化しています。縦方向に鋸歯状の溝を全面に切り、横方向に幅広の突帯を4条づくりだしています。突帯のうち上の2条は写真の左端で終わっており、右側へはさらに続きます。下の2条は破片のほぼ中央から始まり、左側へ続くことがわかります。内面は平滑で、横方向に2条の沈線を施し、全面に赤色塗彩を行なっています。全体に小孔を多数穿っており、内面に裏地を縫い付けていた可能性があります。



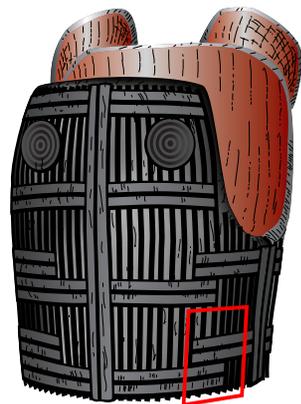
木製甲 表



木製甲 裏



木製甲 下部



木製甲 想定模式図



ます。下端部が直線的で、横断面が緩やかに湾曲することから、胴部下端の破片と考えられます。

木製甲の出土例としては全国で25例ほどあり、愛知県内では2例目となります。県内で下懸遺跡に先行して木製甲片が出土した釈迦山遺跡は、下懸遺跡より約2.5km北の同じく碧海台地縁辺部に位置しており、所属時期もほぼ同じです。安城市南部の碧海台地縁辺部は西三河最大の前方後方墳である二子古墳を始めとして多数の前期古墳と同時期の集落群が展開しており、これまで

も注目されてきた地域です。これらの遺跡群からはこれまでも多数の木製品が出土しています。鹿乗川の河川改修にともなう発掘調査によって、これからもさらなる多様な木製品の出土が期待され、この地域の歴史の解明に重要な資料を提供することでしょう。

なお、小稿を作成するにあたって、高石市教育委員会神谷正弘氏、鹿児島大学橋本達也氏のご教示をえました。記して感謝します。

(調査研究員 樋上 昇)

整理速報 しがこうえん 志賀公園遺跡

糸切り痕をもつ須恵器

98年度の志賀公園遺跡(名古屋市北区)の発掘調査で出土した須恵器は、これまでの猿投窯における製作手法の常識を問い直す発見となりました。

ここで紹介する須恵器は、7世紀から8世紀前葉の資料群が大量に出土した流路(NR 07)から見つかっています。写真1は古墳時代に流行した杯、写真2は7世紀から出現し、8世紀以降流行する杯です。いずれの糸切り痕も、見込(器の底部内面)に見られます。通常、見込はていねいにナデ調整をおこない、たとえ糸切り手法が採用されていたとしても、その痕跡はナデ調整により消されてしまいます。したがって、今回紹介する2例は

ともに、見込部分がナデ調整されずに偶然残った糸切り痕と言えます。

「糸切り」手法は、8世紀の奈良時代になってから採用された製作手法とされてきました。ところが、志賀公園遺跡から出土した糸切り痕(回転糸切り痕?)をもつ須恵器は、7世紀にさかのぼると考えられます。今回、もっとも注目すべき点は、図1の古墳時代以来の須恵器に「糸切り」手法が採用されていることです。今後、このような「糸切り」手法の類例が増加すると、古墳時代の須恵器製作技術を問い直す必要があります。(調査研究員 永井宏幸)



写真1



写真2

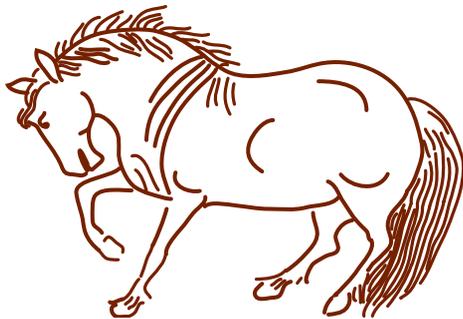


整理速報 うぐいす 鶯窯跡

愛知県瀬戸市岩屋町・鳥原町に所在する鶯窯跡は室町時代の瀬戸窯を代表する窯で、編年資料の標識遺跡としても知られており、調査は一般国道 475 号東海環状自動車道建設に伴う事前調査として、平成 11 年 1 月から 11 月までの 2 年度にまたがり実施しました。

鶯窯跡は瀬戸市のほぼ中央に広がる品野盆地の一角で、水野川流域に広がる盆地中央部から南東方向に細長く伸びる谷状の奥部分の標高 200 ～ 237 m の南側斜面に立地しています。

調査の結果、尾根直下の南斜面に窯が 1 基と斜面を削平し平坦面をつくりだした工房跡を 8 カ所確認しました。尾根直下から中腹にかけては不良品を棄てた灰原で、盗掘穴が目立ち、そのまわりには陶器片が散乱する状況でした。斜度 32 度から 38 度の急傾斜と、厚い堆積層のために困難な灰原調査となり、厚いところでは現地表下 2m40cm を測り、この灰原からは膨大な量の遺物が出土しました。古瀬戸後期を代表する緑釉小皿、尊式花瓶、筒形容器、直縁大皿をはじめとして平碗、天目茶碗、折縁深皿、柄付片口、水注、瓶子、四耳壺、香炉などの器種の他に、出土点数は少ないですが茶入、釜、土瓶、燭台、狛犬等も出土しています。釉は濃い緑色の灰釉製品が主体で鉄釉製品は少数です。なかでも灰原出土の灰釉馬文皿と陶製茶臼、工房跡出土の未焼成天目茶碗は初めての出土例で注目されています。



灰釉馬文皿は底径 11.4cm、現存の高さ 3.9cm で、内底面には篋による左馬が描かれており、口縁部が欠損しているため器種は確定できませんが折縁皿と思われます。躍動的な姿態に描かれた左馬で、胴体がずんぐりして足がやや短く、飾り帯も描かれ、絵の左右幅 13.2cm、上下幅 8.5cm を測ります。内側底面の灰釉刷毛塗りは塗り斑が顕著で、目跡の痕跡も三ヶ所あります。
(主査 小澤一弘)

埋蔵文化財展

発掘された文字世界

御津町ハートフルホールで開催されました

今年は東三河の御津町文化会館で、8 月 11 日から 26 日まで開催しました。今年のテーマは「発掘された文字世界」。最新出土品である安城市・下懸遺跡出土木簡をはじめ、県内各遺跡で出土した墨書土器や木簡を展示しました。

8 月 19 日（土）の講演会は、国立歴史民俗博物館教授の平川南氏が、「発掘された文字が語る日本史」と題し、文字資料から地域史を組み立てる意義や方法をわかりやすく話してくださいました。入場者は約 250 人でした。

また講座では、御津町内の遺跡とセンターの最新成果を、地元とセンターが誇る気鋭の考古学者たちが解説、意外な事実が明らかにされ、いくつも質問が飛び出しました。

展示会場の入場者数は 986 人でした。ご来場、ありがとうございました。



まいぶん愛知 no.66

発行 平成 13 年 10 月 1 日
編集 (財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017
愛知県海部郡弥富町前ケ須新田字野方 802-24
TEL.0567-67-4163 FAX.0567-67-3054
<http://www.maibun.com> Email:doki@maibun.com
印刷 (株)クイックス